

ミステリ読書案内

2023. 6. 26 発行元

第491号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

原 察 追悼特集

5月に入って新聞に原察の訃報が載った。2018年に『それまでの明日』が出版された時、「次の新作を読むことができるのだろうか」とかすかな不安を持ったものだったが、それが現実になってしまった…。

チャンドラーを伝えてくれる作家

私にとっては「チャンドラーを伝えてくれる作家」だった。世の流れは、派手なストーリー展開、むき出しの感情の噴出の方に大きく傾き、主人公がのたうち回る様子を露骨に描く物語が多くなってきている。そんな中で、抑えられた筆致で、気の利いたセリフをさりりと描いてくれる貴重な存在だった原察。大人のミステリだったと思う。

正統派ハードボイルドの話

『ハヤカワ・ミステリマガジン』

2018年の3月号。『原察読本』。最初の長編『そして夜は甦る』を執筆する時、チャンドラーの『さらば愛しき女よ』を傍に置いて、その都度確認しながら書き進めたことが記されている。

自分の好きなものを徹底追求している。原察なりの正統派ハードボイルドの伝統。原察が所蔵しているポケミスの題名が並べられている記事も載っていて、私の好みとよく似ていると感じる。

すべてが代表作なのだけれども…

下に代表作として『そして夜は甦

《原察作品リスト》

そして夜は甦る…1988年・長編
 私が殺した少女…1989年・長編
 天使たちの探偵…連作短編集
 さらば長き眠り…1995年・長編
 愚か者死すべし…2004年・長編
 それまでの明日…2018年・長編
 他にエッセイ集が2冊ある。
 いずれも早川書房
 現在はハヤカワ J A 文庫収録

る』と『さらば長き眠り』の二冊を取り上げてみた。著作数が少なく、すべてが代表作でよいと思う。世間的には直木賞を取った『私が殺した少女』が評価されているが、私は『さらば長き眠り』の方が好きだ。

私は原察、そしてチャンドラーなどの正統派ハードボイルドが今後のミステリ界に影響を与えてほしいと願う。これまでの著作に感謝の念を持って…。

『そして夜は甦る』

1988年早川書房。デビュー作。『このミステリーがすごい!』創刊号の年の年間ランキング第二位になった本。2018年に30周年を記念してハヤカワ・ポケットミステリにも納められた。ポケミスに入っている日本人の作品は浜尾四郎『殺人鬼』、小栗虫太郎『黒死館殺人事件』、夢野久作の『ドグラ・マグラ』と本書の四冊だけ。それだけ歴史に残る名作ということであろう。

西新宿にある沢崎(澤崎)の探偵事務所を海部と名乗る人物が訪ねてきて「先週、ルポ・ライターの佐伯という人がこちらへ訪ねてきたはず」と話し始めた。沢崎が具体的な情報がないと相談には乗れないと話すが、海部は何もしゃべらない。二十万円の入った封筒を置いて、「佐伯が来たなら海部が連絡を取りたがっていたと伝えてくれ」と言って立ち去った。何の手掛かりもないままに沢崎は調査にとりかかるしかなかった。続いて美術評論家の更科修蔵の代理人弁護士から連絡が入り、ルポ・ライターの佐伯の情報がほしいと言われた。更科邸を訪ねると娘の佐伯名緒子から行方不明の佐伯の調査を依頼されることになる。名緒子は佐伯の妻だった。やがて調査は過去の都知事狙撃事件に繋がっていくことになり、複雑な背景が見えてくる。

『さらば長き眠り』

1995年早川書房。長編第三作。『このミステリーがすごい!』の年間ランキングは5位だった。真保裕一の『ホワイトアウト』など傑作ぞろいの年だったせいもあるだろう。『そして夜は甦る』『私が殺した少女』と続いてきた話が本書で一区切りとなる。カバー絵には高校野球と能の踊りが描かれている。文庫版の絵の方がより明確な絵になっている。本書のテーマを示している。

沢崎は400日間事務所を留守にしていた。渡辺探偵事務所。帰ってきてみると、廊下には浮浪者のような男。探偵が帰ってきたなら連絡をしてくれと頼まれたという。男はハザマ・スポーツプラザの川島の名刺を取り出し、その裏面に魚住という人物の名前と電話番号が記されていた。沢崎が川島に電話を入れてみると、川島は昨日不慮の事故で亡くなったという。魚住の電話番号は「ダックアウト」というスナックに繋がりと、魚住なんて知らないと言われた。……やがて沢崎は元高校野球選手の魚住と出会い、11年前にあった八百長事件と、そこから発生したのではないかと思われる魚住の義姉の自殺事件の真相を突き止めようと調査を開始する。これまでシリーズの中で明らかにされてこなかった沢崎と渡辺との関係も次第に…。